



Title	宗教文化の近代的再編成をめぐる研究：新宗教の経験と表象
Author(s)	永岡， 崇
Citation	大阪大学， 2012， 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59394
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	なが 永 岡 たかし 崇
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 5 3 1 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	宗教文化の近代的再編成をめぐる研究 ― 新宗教の経験と表象 ―
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 川村 邦光 (副査) 教 授 杉原 達 教 授 富山 一郎 准教授 宇野田尚哉

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は2部構成で、第Ⅰ部は「宗教経験の近代的形態について」、第Ⅱ部は「新宗教文化の脱教団的展開」である。近代日本における新宗教文化・運動の展開を、天理教を中心にして、その経験と表象の両面から明らかにしようとするものである。序論では、これまでの新宗教研究史を批判的に総括して、問題の所在を示している。第1に、新宗教の天皇制国家への迎合・奉仕論、新宗教の国家神道体制内での制度的な従属と信仰的な自立という二重構造論、新宗教の戦争協力論を批判して、宗教の思想・実践を個別の状況に位置づけて捉えることを提起する。第2に、新宗教に関して蓄積された様々なレベルの多様な言説を検討して、新宗教がひとつの文化として教団を越えて展開し、新宗教文化の領域が成立していることを踏まえて、そこに協働の場を設定し、開かれた公共的な議論の可能性を探ることが重要であると提起する。本論文は原稿用紙で約1300枚に及ぶ。

第Ⅰ部では、天理教が近代日本の支配体制・イデオロギーと関わることを通じて、教義や信仰の形態にどのような変化が起こったのかについて、国家の宗教政策や教団の運動、信徒の動向などから明らかにされる。教祖の中山みきの死後、その信仰共同体の中核を担った飯降伊蔵、またその「おさしづ」は政府の干渉と対峙しつつも、国家権力への妥協を追認し続けていくことになり、やがて国家権力との緊張関係が喪失されていく。伊蔵の死後、天理教は教派神道の一派として独立すると、国家との新たな関係を迎える。国民教化に有用な宗教として、みきの教えが国家神道・国家主義的な枠組みのなかで形成され、教団の運営方針や信仰を決定していくことになる。戦前・戦中の天理教の教義は帝国主義的・植民地主義的な要素と分かちがたく結びつき、国策・戦争協力を推進していく。信徒の労働奉仕である「ひのきしん」運動は戦中に国家への奉仕として教団を挙げて展開され、信徒たちのアイデンティティを支えるものとなっていった。敗戦後、天理教ではみきの原典に基づいて、新たに教義・組織制度を確立していく過程で、戦前の国家主義的・帝国主義的な信仰や実践を逸脱したものとして顧みられなくなる一方で、戦後も「ひのきしん」が推進されたように、戦前・戦中期に再編成された教義・信仰運動は継承されてきた。

第Ⅱ部では、新宗教運動を教団や信徒のみならず、研究者も含めた、教団外の人びとによって構成される関係の網の目のなかで展開される、重層的でダイナミックな文化現象として捉え、それを新宗教文化と呼び、新宗教文化が教団の枠を越えて展開されてきた様相を明らかにして、教団の内外による新宗教研究を分析して考察し、近代における宗教文化の思想的課題を見定めることを目指している。戦後の天理教や金光教、大本などの教祖研究においては、戦前の異端の信仰者や新宗教批判者の文書、また特別高等警察（特高）の新宗教調査書などが、新宗教文化の一翼を担ってきたとはいえ、無視されてきた。しかし、特に新宗教・教祖の異端性や反体制性に関する論点を、研究者は特高と共有して、新宗教の意義を評価してきたことが明らかにされる。また、1960年代に行なわれた『大本七十年史』編纂事業を取り上げ、大本教団の信仰当事者と教団外の実証者が協力して、教団史を作成する過程のなかで現われた、両者の間の葛藤が分析され、信仰者と非信仰者が対話することによって、新たな新宗教文化を生み出すことのできる可能性を提示し、さらに分析者がその協働の場に介入して、公共的な議論の場を構築し、さらなる新宗教文化を発展させることができ、そこに研究者の位置があるのではないかと論じている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の特色はたんに新宗教研究の枠内に留まっていなかったところにある。第Ⅰ部での政治的・社会的コンテクストでの天理教を中心とした新宗教運動史の研究、第Ⅱ部での新宗教運動を複眼的な視点から捉えた新宗教文化の研究、この二つの研究が接続され、新たな新宗教・宗教研究の領域が開拓されているところに、この論文の独創的な構成と論述があり、以下、本論文の評価されるべきところを3点にわたってあげてみよう。

まず第1に評価されるのは、新宗教運動が支配体制の内側で国家主義や帝国主義、侵略戦争との関わりをなかで再編されてきた歴史的過程を、先行研究を批判的に踏まえつつ、新たな文献史料に基づいて緻密に分析したことである。とりわけ、教団を国家体制と妥協させたとして否定的に評価され、これまでほとんどなされてこなかった、天理教草創期の指導者・飯降伊蔵、そして発展期の指導者・中山正善の研究は、新宗教史研究の新たな局面を切り開き、学会に大きく寄与するものである。第2に、これまで別個に行なわれてきた、新宗教運動史と新宗教史の研究を総合して理解するための枠組み、すなわち新宗教文化の領域を提示し、宗教における経験と表象に関する重層的でダイナミックな歴史学的・思想史的研究の視座を提起したことが評価できる。第3に、これまでの新宗教研究を研究者自身の思想や学問的な背景から問い直している点である。研究者自身の研究に対する姿勢が自らの社会的・政治的な背景と決して無縁ではないことを明らかにし、そして研究者自身が新宗教文化に介入することによって、異なる立場の人びとと直接に接触し交渉する場を共有し、両者の協働作業を通じて、新たな新宗教文化を構築する可能性を提示したところは、宗教研究のさらなる発展に寄与するものであると評価できる。

本論文では、新宗教研究を主題としているが、主に取り上げられているのは天理教であり、その他にはわずかに大本や金光教をあげるに留まっている。他の教団との比較研究は今後の課題として残されている。新宗教運動では信仰はもとより、布教を運動の要としているが、戦前・戦後における海外・植民地での布教の実態研究が不十分であり、また布教

や信徒層の研究において階層やジェンダーの視点から分析し論ずることによって、さらに考察を深めることができたと思われる。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていく課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。